

Title	支那古代の海洋思想
Sub Title	
Author	橋本, 増吉 (Hashimoto, Masukichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1942
Jtitle	史学 Vol.20, No.3 (1942. 3) ,p.1(337)- 20(356)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19420300-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

支那古代の海洋思想

橋 本 増 吉

我が國のやうな島の住民は、海洋に對する觀念も古くより發達してゐたやうで、我が民族の最古の思索かと推せられる、國生みの神話に於て、高天原に對する大海原の存在は、もはや既定の事實として考へられてゐるのである。

けれども、支那に於ては、古くは海洋に對する觀念がそれほど明確ではなかつたやうで、その最古の思想を傳ふるものかと推せられる、神話物語の名残について見るも、天地の存在を既定の事實として考へ、海洋に對する觀念は割合に稀薄なやうに認められる。たとへば、禹の治水傳説にしても、種々の形で傳へられてはゐるが、何れも元來大陸の存在を認めた上で、そこに起つた洪水を治めて、海に流したとなすもので、恐らく春秋末期或は戰國初期の頃、儒者によりて完成されたと推せらるゝ、夏書禹貢の

篇に述ぶるところも、その構想に於ては同様で、東方の渤海・黄海・東海に對する知識を有するに過ぎないのである。

二

然るに、史記の孟荀列傳に傳へてゐる騶衍の思想は、著しくそれと異り、中國即ち赤縣神州を中心として、井田形に九州があり、裨海ありて各州の周圍を環らし、更に大瀛海ありて全九州の外圍を環らしてゐるとなすのである。而も、その各州の周圍をなす裨海すらも、「人民禽獸能く相通するものなし」といふのであるから、九州の周圍をなす大瀛海なるものに至つては、その廣大なること、殆ど人智の測り知るべからざるものとして、述べられたものゝやうである。

而して、「儒者の所謂中國なる者は、天下即ち九州の八十一分の一」に過ぎないもので、「赤縣神州内の九分の一に當り、その九分の一の地域が更に九州に分たれて居り、それが即ち禹の序する九州である」と認めてゐるのであるから、禹貢に云ふ海洋、即ち今の渤海・黄海・東海などは、所謂裨海の一部として解してゐたものと、認めなければなるまいかと思はれる。して見ると、儒者の所謂中國は赤縣神州の中央部ではなく、その東部に位置する地域として、認めゐたりしものかとも、推考せらるゝのである。

元來、騶衍の思想全貌が如何なるものなりしか、詳細な記録を遺さないものであるから、十分にこれを

知ることには出来ないが、孟荀列傳に記するところによると、

乃深觀陰陽消息、而作怪迂之變、終始大聖之篇十餘萬言、其語闕大不經、必先驗小物、推而大之、至於無垠、先序今以上至黃帝、學者所共術、大竝世盛衰、因載其禮詳度制、推而遠之、至天地未生、窈冥不可考而原也、先列中國名山大川通谷禽獸、水土所殖、物類所珍、因而推之、及海外人之所不能睹、稱引天地剖判以來、五德轉移、治各有宜、而符應若茲、

と見えてゐるのであるから、その地理に關する説明は恐らく後の山海經にその面影を傳ふるものではあるまいか。また「至天地未生、窈冥不可考而原也」といひ、或は「稱引天地剖判以來、五德轉移、治各有宜、而符應若茲」とあるによれば、淮南子の天文訓・墜形訓などにも、亦その名殘を留むるものではないかと、推せられるのである。

三

山海經の篇目には古來異動があり、また、内容にも多くの錯簡あることは、曾て小川琢治氏が詳論せられたところであるが、その考證研究の全部に互る當否は、今姑らくこれを措き、山海經の内容は元來南山經・西山經・北山經・東山經・中山經が最古の部分で、後に海外及び海内の南西北東の各四經が附加せられ、大荒の東南西北四經と最後の海內經とは、更にその後添加せられしものとなす内外諸學者等

の所説は、一應尤もとも見えるのである。

けれども、今その地理的構想を見るに、まづ、中央に山地ありて、中と南西北東の五部に分たれ、その周圍に海洋があり、その海洋の外にまた南西北東の諸國があり、その海洋の内部に沿うて、更に南西北東の諸國を認めてゐる。されば、その兩者は同一海洋の内外に沿へる陸地、及びその海中の島嶼を意味するもの、やうである。而して、大荒はその外陸の外邊をなす大陸山地を意味し、更にその周圍に東海・西海・南海・北海なる海洋の存在を認め、その海洋の内部に沿へる諸國について記せるものを、海内經と稱してゐる。即ち、一大陸の周圍を繞りて海洋があり、更にその周圍に大陸があり、その周圍はまた海洋を以て繞らされ居ることを、述べてゐるのであるから、禹貢の九州や騶衍の九州とは、全くその構想を異にするものである。

しかも、その海内經の内容が、

東海之内、北海之隅、有國、名曰朝鮮天毒、其人水居、

といひ、

西海之内、流沙之中、有國、名曰壑市、西海之内、流沙之西、有國、名曰沮葉、流沙之西、有鳥山者、三水出焉、爰有黃金璿瑰丹貨銀鐵、皆流于此中、(中略)、流沙之東、黑水之西、有朝雲之國、司焜之國、黃帝妻雷祖、生昌意、

とあり、

南海之内、黒水青水之間、有木、名曰若木、若水出焉、(中略)、有鹽長之國、有人焉、鳥首、名曰鳥氏、有九丘、以水絡之、(中略)、有木、青葉紫莖、玄華黃實、名曰建木、百仞無枝、有九櫺、下有九枸、其實如麻、其葉如芒、(中略)、西南有巴國、大暉生咸鳥、咸鳥生乘釐、乘釐生後照、後照是始爲巴人、(中略)、南方有贛巨人、人面長臂、黑身有毛、(中略)、有羸民、鳥足、有封豕、有人曰苗民、(中略)、南海之内、有衡山、有菌山、有桂山、有山、名三天子之都、南方蒼梧之丘、蒼梧之淵、其中有九嶷山、舜之所葬、在長沙零陵界中、とあり、また、

北海之内、有蛇山者、蛇水出焉、東入于海、(中略)、北海之内、有山、名曰幽都之山、黒水出焉、其上有玄鳥、玄蛇、玄豹、玄虎、玄狐、蓬尾、(中略)、帝俊有子八人、是始爲歌舞、帝俊生三身、三身生義均、義均是始爲巧倕、是始作下民百巧、后稷是播百穀、稷之孫、曰叔均、是始作牛耕、大比赤陰、是始爲國、禹鯀是始布土、均定九州、と見え、更に、

共工生后土、后土生噎鳴、噎鳴生、歲十有二、洪水滔天、鯀竊帝之息壤、以堙洪水、不待帝命、帝命祝融、殺鯀于羽郊、鯀復生禹、帝乃命禹、卒布土、以定九州、

といふ記事を以て終つてゐるところを見ると、この山海經の撰者は、その叙説するところを以て、禹の序した九州として認めてゐる譯であらう。

されど、その内容は禹貢の内容と全く異なるばかりでなく、九州の區劃として認むべき何等の記事も存しない。かつ、南山經に於ては、

離山其首曰招搖之山、臨于西海之上、

とあり、また、

麗麇之水出焉、而西流注于海、

とあり、或は滂水虚勺之山に出で、「東流注于海、」といひ、丹水丹穴之山に出で、「南流注于渤海、」といひ、汎水發爽之山に出で、「南流注于渤海、」といひ、黑水鷄山に出で、「南流注于海、」といひ、佐水南禺之山に出で、「東南流注于海、」となし、西山經には、海については、「騶山是錚于西海、」とあり、淩水騶山に出で、「西流注于海、」とあり、「鱒魚狀如鯉魚、魚身而鳥翼、(中略)、常行于西海、遊於東海、」とあり、また神英招も馬身鳥翼で、「徇于四海、」とあり、若水崦嵫之山に出で、「西流注于海、」とある記事を見るのであるが、山については、崑崙之丘・玉山の記事が見え、

崑崙之丘、是實惟帝之下都、神陸吾司之、其神狀虎身而九尾、人面而虎爪、

玉山是西王母所居也、西王母其狀如人豹尾、虎齒而善嘯、蓬髮戴勝、是司天之厲、及五殘、

とあり、また太華之山・小華之山・蟠冢之山・崇吾之山・不周之山・積石之山・三危之山・天山・陰山等諸山、河・洛・赤・黑・渭・涇等諸水の記事を見るのであり、北山經には、山に太行之山・王屋之山・孟門之山・碣石之山・鴈門之山・涇山・咸山・虢山等の諸山、水には河水・汾水・伊水・汜水・洹水・漳水・洧水・彭水・虜沱水等諸水の記事があり、かつ、湖灌之水は「東流注于海」、囂水は「西北流注于海」と見え、東山經には、食水嶽嶽之山に出で、「東北流注于海」、滅水番條之山に出で、「北流注于海」、姑兒之水姑兒之山に出で、「北流注于海」などとあり、泰山・空桑之山・姑射之山等の記事を見るのであるから、所謂東山經は主として山東地方、北山經は主として山西・河北方面で、鴈門・碣石に至るまで、西山經は陝西・甘肅より新疆省の崑崙・天山の邊に及ぶことが知らるゝも、南山經だけは或は錯簡のためかも知れないが、その位置頗る曖昧で、今日の何れを意味するか、不明である。中山經は南は荆山・衡山より、北は梁山・歷山・朝歌之山に及び、東は太山より、西は岐山・岷山に互る地域を意味し、河・洛・江・漢の諸水を包括するのである。されば、所謂五藏山經に述ぶるところの境域は、略禹貢の境域に該當すべく、たゞ西方が稍々延びて居り、南方の境地に不明の點が存するだけである。

然るに、海外四經・海内四經に記するところは、時に三苗國（海外南經）だの、肅慎之國（海外西經）だの、匈奴（海内南經）、東胡・夷人・貊國（以上海内西經）・犬戎國・倭・朝鮮（以上海内北經）・大夏・月支（海内東經）など、その方位には誤謬存するも、とにかく實在の國名も見えないではないが、その

多くは架空のもので、特に海外諸經にその著しきものあるを、知るのである。而も、崑崙墟を以て、海外南經にては岐舌國の東にありと記し、海外西經には全く記すところなく、たゞ「女丑之尸生、而十日炙殺之、」云々の記事があり、海外北經には崑崙の北に衆帝之臺ありとなし、海外東經には、

湯谷上有扶桑、十日所浴、在黑齒北、居水中、有大木、九日居下枝、一日居上枝、との記事を見るのであるから、所謂海外經に述ぶる地域は、かの十日の出入する所で、遠く崑崙墟を望見する地方なるべきことを、意味するものゝやう考へられるのである。

それから、海内南經に、

甌居海中、閩在海中、

桂林八樹、在番禺東、

兕在舜葬東、湘水南、其狀如牛、蒼黑一角、

蒼梧之山、帝舜葬于陽、帝丹朱葬于陰、

などの記事あるによれば、その福建・廣東より湖南の地方を意味するものなること明かであるが、而も「弱水の上」に建木あることも、併せ記すを見れば、更に西方甘肅西部の地方にまで及ぼすものゝやうである。

また、海内西經には、

鴈門山、鴈出_二其間_一、在_二高柳北_一、高柳在_二代北_一、

流沙出_二鐘山_一、西行、又南行_二崑崙之墟_一、西南入_レ海、黑水之山、

東胡在_二大澤東_一、夷人在_二東胡東_一、貊國在_二漢水東北_一、地近_二于燕_一、滅_レ之、

海內崑崙之墟在_二西北_一、帝之下都、崑崙之墟、方八百里、高萬仞、上有_二木禾_一、長五尋、大五圍、面有_二九井_一、以_レ玉爲_レ檻、面有_二九門_一、門有_二開明獸_一守_レ之、百神之所_レ在、在_二八隅之巖_一、

赤水出_二東南隅_一、以行_二其東北_一、西南流注_二南海_一、厭火東、

河水出_二東北隅_一、以行_二其北_一、西南又入_二渤海_一、又出_二海外_一、卽西而北入_二禹所_レ導積石山_一、

洋水黑水出_二西北隅_一、以東、東行又東北、南入_レ海、羽民南、

弱水青水出_二西南隅_一、以東、又北、又西南、過_二畢方鳥東_一、

崑崙南淵、深三百仞、開明獸身大類_レ虎、而九首、皆人面、東嚮立_二崑崙上_一、

とある。その記するところ、頗る明瞭を缺くも、主として崑崙墟を中心とし、その東北には流沙の連行するあり、更にその東方には東胡貊國あり（貊國を漢水の東北とするは、錯簡なるべし）、赤水是墟の東南隅より出で、南海に注ぎ、河水は墟の東北隅より出で、一旦渤海に入るも、又海外に出で、南行し、又北行して、積石山に入るとなし、洋水黒水は墟の西北隅に出で、東行し、弱水青水は墟の西南隅に出で、東北行し、又西南行すといふのであるから、所謂海内崑崙之墟なるものも、大凡西山經の崑崙

之丘と同様に、實際上の崑崙山脈を目安としてゐることは、疑ひなく、支那民族が天下第一の大河として重視した黄河を以て、海内崑崙の墟に出で、渤海に入り、更に海外の國土を通過して、積石山に入り、また同一の水路を反覆するものと考へし如き、古代支那民族の世界に對する觀念を暗示せるものとして、特に興味深きこと、考へられるのである。

つぎに、海内北經に記するところは、崑崙墟の北といひ、或は東北といひ、また犬戎國などを掲げ、「蓋國在_二鉅燕北倭南、倭屬_レ燕、_一といひ、「朝鮮在_二列陽東、海北山南、列陽屬_レ燕、_一といひ、「蓬萊山在_二海中_一」となすを見れば、所謂海内北經なるものは、崑崙の北部で、東方は遠く朝鮮・倭地・蓬萊山に及ぶものと認めたいやうである。たゞ、「崑崙虛南所_レ有汜林、方三百里、」なる一句は、恐らく錯簡として見るべきものであらう。更に、海内東經には、大夏・月支之國を擧げ、「西胡白玉山在_二大夏東、蒼梧在_二白玉山西南、皆在_二流沙西、崑崙墟東南、崑崙山在_二西胡西、皆在_二西北、_一なる文句を掲げ、雷澤・琅瑯臺・會稽山・大江・浙江・廬江・閩・彭澤等の名稱を列擧し、淮水・湘水・漢水・溫水・潁水・汝水・涇水・渭水・白水・沅水・贛水・泗水・洛水・汾水・沁水・濟水・虢洹水・漳水等を列記し、洞庭・漢陽・臨汾・華陽・長垣・華陰・蜀・象郡・淮陰・東海・南海・番禺・桂陽・成阜・鉅鹿・渤海・遼陽・晉陽等の地名を見るのであるから、その範圍は殆ど支那本部の全地域に亙り、かつ、東は遼東の地にまでも及んでゐる譯で、到底海内東經の名稱には相當しないものである。而も、海内四經の地理思想は、

要するに秦漢時代の地理思想を越えざるもので、海外四經の地名が三苗・肅慎等二三を除きて、殆ど全く現實の地名にあらざることと、著しくその趣を異にするのである。

つぎに、大荒四經に至つては、その内容頗る海外四經に類似し、赤水・黒水だの、蒼梧之野・崑崙之丘など、他の諸經に見る名稱も、亦全く見ないではないが、概して現實の地理とは無關係なものとなつてゐる。而も、最初に掲げたやうに、最後の海内經がその全部を包括して、禹の定めし九州と認めてゐることは、支那民族の地理的世界觀の發展と共に、禹治水の範圍も亦擴大せらるゝに至つた事實を、示すものであらう。かつ、その最後の篇として海内經を附加せることは、世界の陸地全部がその周邊を海洋により圍繞されゐる事實を、認めた爲めであらう。何となれば、海外經・大荒經を以て終ることは、世界の終極が大陸なることを、思はしむるに至るからである。してみると、山海經の世界觀は要するに騶衍の世界觀と相通するもので、たゞ異るところは、騶衍の世界觀が井田法の思想に基いてゐるに相違ないと、考へられるに對し、山海經の世界觀は中央大陸の周圍に大海があり、更にその周圍に大陸があり、そのまた周圍は大海をなすと認むる點に於て、騶衍の思想以上に印度の世界觀と相通するものあるやに、感ぜられる點である。もとより印度思想の世界が圓形なるに對して、支那ではその固有の天圓地方の思想に基き、恐らく方形の大陸を想像したものであらう。

もし以上の考定にして誤りなしとすれば、内外多くの學者が論せしやうに、「最も古く行はれた山海經

は五藏山經だけであつたのが、後に海外海内兩經八篇を附加し、更にその後大荒經四篇・海内經一篇を加へて、現行本の全經十八卷となつた」となす所説は誤りで、多少の錯簡はもとより免かれないとは思はるゝが、而も、その全篇の組織内容は最初より今日見るが如きものであつたかと、推考せらるゝのである。蓋し、南山經だの海内東經に見るが如く、甚しく變調をなすものも存しないではないが、大體に於て、五藏山經より海内四經に至るまでは、現實の地理上の觀念に基いて、記載せられ、それから、大海を隔てた海外四經・大荒經・海内經に於て、現實の地理とかけ離れた記載となり、更に大海を以て圍まれた大陸を聯想せしむる事實が、騶衍の「先列中國名山大川通谷禽獸、水土所殖、物類所珍、因而推之、及海外人之所不能睹」とある叙説法に類するもので、その名残を傳ふるにあらざるかを、思はしむるものが存するからである。かつまた、その崑崙に關する記載の如きも、印度の迷廬山即ち須彌山思想の影響を思はしむるものがあり、それ等の點に於ては、また淮南子墜形訓の思想とも相通するところが、認めらるゝのである。

四

淮南子墜形訓を見るに、その冒頭に、

墜形之所載、六合之間、四極之内、昭之以日月、經之以星辰、紀之以四時、要之以太歲、

とあり、つぎに「天地之間九州八極」となし、「何謂九州」として所謂九州を説明し、

東南神州曰農土、正南次州曰沃土、西南戎州曰滔土、正西兪州曰并土、正中冀州曰中土、西北臺州曰肥土、正北濟州曰成土、東北薄州曰隱土、正東陽州曰申土、

となすのである。それは恰も山海經に於て、方位によりて大陸をば中南西北東の五藏山經に分つ思想と、同一系統に屬するもので、更にその各中間の方位を取れば、即ち淮南子墜形訓の九州となる譯である。而も、墜形訓に於て、更に、

九州之大純方千里、九州之外乃有八殯、亦方千里、自東北方、曰大澤、曰無通、東方曰大渚、曰少海、東南方曰是區、曰元澤、南方曰大夢、曰浩澤、西南方曰渚資、曰丹澤、西方曰九區、曰泉澤、西北方曰大夏、曰海澤、北方曰大冥、曰寒澤、凡八殯八澤之雲、是雨九州、八殯之外、而有八紘、亦方千里、自東北方、曰和丘、曰荒土、東方曰棘林、曰桑野、東南方曰大窮、曰衆女、南方曰都廣、曰反戸、西南方曰焦僥、曰炎土、西方曰金丘、曰沃野、西北方曰一目、曰沙所、北方曰積水、曰委羽、凡八紘之氣、是出寒暑、以合八正、必以風雨、八紘之外、乃有八極、自東北方、曰方土之山、曰蒼門、東方曰東極之山、曰開明之門、東南方曰波母之山、曰陽門、南方曰南極之山、曰暑門、西南方曰編駒之山、曰白門、西方曰西極之山、曰閭闔之門、西北方曰不周之山、曰幽都之門、北方曰北極之山、曰寒門、凡八極之

雲、是雨_二天下_一、八門之風、是節_二寒暑_一、八殯八澤之雲、以雨_二九州_一、而和_二中土_一、
と叙し、また、

凡_〇海_〇外_〇三_〇十_〇六_〇國_〇、自_二西北_一至_二西南_一方、有_二修股_一民、天民、肅慎民、白民、沃民、女子民、丈夫民、
奇稽股民、一臂民、三身民、自_二西南_一至_二東南_一方、有_二結曾_一民、羽民、謹頭國民、裸國民、三苗民、
交股民、不死民、穿曾民、反舌民、豕喙民、鑿齒民、三頭民、修臂民、自_二東南_一至_二東北_一方、有_二大
人國、君子國、黑齒民、玄股民、毛民、勞民、自_二東北_一至_二西北_一方、有_二跂踵_一民、句嬰民、深目民、
無腸民、柔利民、一目民、無繼民、

となし、かつ、

維棠武人、在_二西北_一隅、磻魚在_二其南_一、有_二神_一二人、連臂爲_二帝_一、候_二夜_一、在_二其西南_一方、三珠樹在_二其東
北方、在_二赤水_一之上、崑崙華丘在_二其東南_一方、(中略)、和丘在_二其東北_一隅、三桑無枝在_二其西_一、夸父耽
耳在_二其北方_一、(中略)、昆吾丘在_二南方_一、軒轅丘在_二西方_一、巫咸在_二其北方_一、立_二登保_一之山、暘谷搏桑在_二
東方_一、

とあり、また、

流水就通、而合_二于黃海_一、……流水就通、而合_二于青海_一、……流水就通、而合_二于赤海_一、……流水就通、
而合_二于白海_一、……流水就通、而合_二于玄海_一、

とあるが如き、大體に於て山海經の思想を繼承し、更に多少これを發展せしめしものに過ぎないかと、認められる。即ち、その九州説の如き、曩にも述べし通り、山海經にて中央及び四方に分つ思想に基きて、その中間方位を加へ、中央及び八方位として、その九州を構成せしものであり、また、その海外三十六國なる思想も、山海經の海外四經の思想と同様に、所謂九州の周圍に海洋の存在を認めてゐるものと考へられ、所謂八嶺八澤は即ちこれに當るものであらう。而も、その周圍に八紘の地を認め、更に八極を認め、三十六國を認め、また諸丘諸山等の存在を認めてゐることは、恰も山海經に於て五藏山經を繞る海洋の外邊に、海外諸國を認め、更にその周圍に大荒諸國を認め、また海内經の諸山諸國の存在を認めてゐるのと、全くその構想を一にするものであり、而も、その周圍が更に大海を以て繞らされる事實は、山海經に於ても、最後の海内經の中に、東海・北海・西海・南海の名稱あるによりて、認められ得ると同様に、淮南子墜形訓に於ても、また青海・赤海・白海・玄海なる名稱ある事實によりて、これを認むることが出来るのである。たゞ、山海經には五行思想の影響として認めらるべきもの、稀薄であるに對し、淮南子墜形訓の内容は、五行思想の影響を被ること著しく、中央の海として黃海を想定し、他の海洋にも五行の方位を示す色を以て名け、八紘八極の外側の國としても、八の四倍でなく、九の四倍三十六國を認めてゐる。

なほ、これ等の地名・山名・水名・國名等、山海經と共通のものが少くないのであるが、殊に崑崙に

對しては、兩者共に最もこれを重視してゐるのである。而も、墜形訓に、

崑崙之丘、或上倍之、是謂涼風之山、登之而不死、或上倍之、是謂懸圃、登之乃靈、能使風雨、或上倍之、爲維上天、登之乃神、是謂太帝之居、

とあるのは、印度思想の須彌山が、下部の廣さに對し、頂上は二倍の廣さをなし、巨大な果實の子房の形に類してゐるといふ思想と、相通するものが認められる。またかの、爾雅釋丘に、「三成爲崑崙丘、」とあるのは、この思想と關聯あるものであらう。なほ、

扶木在陽州日之所曠、建木在都廣、衆帝所自上下、日中無景、呼而無響、蓋天地之中也、若木在建木西、末有十日、其華照下地、

とあり、或は、

禹乃以息土、填洪水、以爲名山、掘崑崙虛、以下地、中有增城九重、其高萬一千里百一十四步二尺六寸、上有木禾、其修五尋、珠樹玉樹琬樹不死樹在其西、沙棠琅玕在其東、絳樹在其南、碧樹瑤樹在其北、旁有四百四十門、門間四里、里間九純、純丈五尺、旁有九井、玉橫維其西北之隅、北門開、以內不周之風、傾宮旋室、縣圃涼風燹桐、在崑崙閭闔之中、是其疏圃、疏圃之池、浸之黃水、黃水三周、復其原、是謂丹水、飲之不死、

といひ、また、

河水出_ニ崑崙東北隅_一、貫_ニ渤海_一、入_ニ禹所_レ導積石山_一、赤水出_ニ其東南隅_一、西南注_ニ南海丹澤之東_一、赤水之東、弱水出_レ自_ニ窮石_一、至_ニ于合黎_一、餘波入_ニ于流沙_一、絶_ニ流沙_一、南至_ニ南海_一、洋水出_ニ其西北隅_一、入_ニ于南海羽民之南_一、凡四水者、帝之神泉、以和_ニ百藥_一、以潤_ニ萬物_一、

とあるが如き、その水經記事は頗る山海經海内西經に記するところと類するものがあり、扶木・建木に關する記事は、海内東經の記するところと類してゐる。たゞ、崑崙に關する記事は、その三成となすものも、また、増城九重となすものも、共に山海經にはその類似の記事を見出すことが出來ないのであるが、楚辭天問中には、

崑崙縣圃、其尻安在、増城九重、其高幾里、

とあり、それと同一の思想を傳へてゐる。

要するに、淮南子墜形訓の世界思想は、明かに山海經の世界思想を繼承して、更に一層發展整備せるもので、五行思想の影響も著しく、楚辭の離騷・天問などの思想とも、相通するところが存するのであるから、結局騶衍の世界觀にその系統を引けるものと見るべきではあるまいか。而も、その印度の世界觀との類似は、騶衍の思想以上に、山海經や淮南子墜形訓の思想に於て、これを認むることが出来るのである。

五

されど、元來大陸が大海に圍繞されてゐるといふ考へは、世界の多くの民族の間に抱懷された思想であつたやうで、歐羅巴方面の古地圖について見るも、たとへば、Hecataeus (B. C. 500) の世界圖にしても、Eratosthenes (B. C. 200) の世界圖にしても、或は Strabo (A. D. 19) の世界圖にしても、何れも皆地中海を中心とした世界が、更に大海によりて圍繞されたものとして、畫かれてゐるのである。支那に於ても同様に、その大陸の周邊が大海を以て圍まれ居るものとして、認めてゐることは、山海經及び淮南子墜形訓の世界觀に於てこれを見るばかりではなく、また、本來支那民族の宇宙觀とも關聯を有するものではあるまいか。嘗ても説いたやうに、元來支那民族の宇宙觀は、所謂蓋天説であつたものが、穹天説となり、渾天説となつたやうで、その間に昕天・宣夜・安天等の諸説も生じたものと推せられる。尤も同じく蓋天説にも時代により多少の相違があるやうで、粗朴な蓋天説は單なる天圓地方の考へであつたであらうが、須彌山の影響かと推せられる崑崙説と、天に對する觀測の發達せる結果として、晉書天文志に、

天似_二蓋笠、地法_二覆槃、天地各中高外下、北極之下、爲_二天地之中、其地最高、而滂滂淹四隤、とあるやうに、天も地も共に中央部が最も高くして、四邊が低く、笠の如き形をなすと、認めたのであ

るが、何れにせよ蓋天思想では、四極或は八極に四柱或は八柱ありて、天を支へ居るものとしての觀念は、棄てることが出来ない譯で、そこに扶木だの建木だの若木など、太陽の上下を扶くるものゝ存在を認め、楚辭の離騷・天問や淮南子の天文訓・墜形訓などに見る思想を、生ずるに至つた譯であらう。而も、この場合も、天地の周圍が大海を以て繞らされゐるとなすことが、太陽の咸池より出で、咸池に入るとなす思想によりて、これを推し得ることは、嘗て論じた通りであるが、更にそれが穹天説となり、渾天説となりても、大地の周圍が大海なりとなす思想には、何等の變化も見なかつたのである。随つて、大地はまた常に靜止するものではなく、動いて止まざるものであるといふ地動説も、發生し得べき譯であらう。かの淮南子天文訓に、

堪輿徐行、

とあり、また、尙書考靈曜に、

地常動不_レ止、譬如_下人在_二舟中_一而坐、舟行而人不_レ覺、

とあるが如き、思想の發生を見るに至りしことも、もとより不思議とするに足らないかと考へる。況んや、これを證する事實として、周髀算經の所謂北極璿璣四游の天象を見るのであるから、更に一層その事實を確認したことゝ考へる。

要するに、支那古代に於ける海洋思想は、海洋を以て交通、運輸、漁撈等、實生活上に利用する意味

に於ては、多く考へられるところなく、たゞその世界觀・宇宙觀に於て、大陸と大陸とを隔絶し、或は天と地との關係上役立つものとして、認めて居り、人類の到底越え得ざるものとして、これを觀念せしに過ぎないやうである。蓋し、支那民族が本來全く大陸的の民族で、海洋的の民族でないことを、實證するものであらう。(了)

註

- 1 禹貢の外に、周禮及び逸周書の職方・爾雅・呂子春秋等に九州説があり、また馬融の虞舜十二州説など見えるのであるけれども、その構想は何れも禹貢と同様で、たゞその境域に多少の差違あるに過ぎないのである。
- 2 小川琢治博士「山海經篇目の考證」「同補遺」「山海經の錯簡」等(支那歴史地理研究所收)
- 3 著者「駢衍の世界觀」(東亞論叢第五輯)
- 4 同前
- 5 同前
- 6 同前
- 7 能田忠亮氏「周髀算經の研究、五、北極璇璣四游」(東方文化學院京都研究報告第三冊)